

「マルコによる福音書」における子ども — その役割と機能 —

菅原裕治

はじめに

キリスト教教育・保育という言葉がある。その言葉が意味する事柄を明確に定義することは困難である。教育学の門外漢が、あえて二〇〇〇年に及ぶキリスト教教育の歴史を概観するならば、以下のように言うことが出来るだろう。その起源は、教会による信徒の訓練、あるいは信徒の子どもたちを対象とした教育であった⁽¹⁾。しかし、教会の世俗化と共に、そして近現代の学校制度の整備と共に、キリスト教教育という言葉は、その定義や目的について、狭義の意味と広義の意味を持つようになった。狭義の意味は、その起源とほぼ同じあり教会・神学校・修道院等が主体となって行なう教育である。しかし、広義の意味は、かなり異なった意味を持つ。主体は制度化された学校であり、それが行なわれる場もキリスト教文化圏に限らず、その目的も信徒教育ではない。広義の意味でのキリスト教という言葉は、その学校の教育・保育の特色を示す言葉、すなわち他の教育（一般的な公教育あるいは他宗教が行なう教育）との違いを示す修飾語に他ならない。これらからキリスト教教育という言葉の意味を定義するならば、それは特に「キリスト教的人格の陶冶」⁽²⁾を目的とした、数多くの教育活動の一つと表現することが出来るだろう。

狭義の意味でも広義の意味でも、教会の神学はキリスト教教育に大きな影響を与えている⁽³⁾。またその神学に影響を与え、キリスト教教育と深い関連性を持つものが聖書である⁽⁴⁾。言い換えれば、キリスト教教育の思惟的源泉は、神学と聖書に他ならないのである。しかし、神学におけるは勿論のこと、聖書における教育に結びつくような事柄について扱おうとすると、たとえ子どもについてと大雑把な限定をしたとしても、それには膨大な頁が必要である⁽⁵⁾。それ故に、我々は、キリスト教教育において狭義の意味でも広義の意味でも本

質的な関連性を持つ人物イエス、特に新約聖書の「マルコによる福音書」から考察を述べることに限定する。我々の目的は、物語として「マルコによる福音書」を見た場合、子どもたちがどのように描かれているか、その意味は何かを考察することである。

歴史的・言語的背景

「マルコによる福音書」を物語として考察する場合、その物語の背後にある歴史的な事柄については考察対象とはならない。しかしながら、子どもという限定された対象について考察しようとする場合、物語の「歴史的読者」あるいは「暗示的読者」が共有していると期待されている「既存の子ども観」あるいは、「言語」について明らかにしておくことは必要だろう。それは、「現代の読者」も物語を理解する上で必要な共通コードだと考えられるからである⁽⁶⁾。

既存の子ども観とは、イエス時代のユダヤ教・ユダヤ人社会の子ども観である。その特徴について概略を述べると、第一に、子どもを神からのめぐみ・祝福として考え、同時に厳しい教育の対象とするということがある。次に幼い子どもを養育する義務を負うのは妻または雇われた養育係であった⁽⁷⁾。そして教育という営みの主体となるのは父親であったということである。父親は、愛すると同時に鞭打つというような、子どもを厳しく育てることが求められ、甘やかすことは愚かなことと厳しく禁じられていた⁽⁸⁾。恐らく「マルコによる福音書」の物語世界においても、この子ども観が前提とされており、また物語の「歴史的読者」あるいは「暗示的読者」にもそれを子どもを理解する上での共通コードとして前提されているだろう。

言語について言えば、この論文では、「子ども」と包括的な表現を用いているが、ヘブライ語でもギリシア語でも、子どもについては多くの言葉が

存在する。特にギリシア語では、男女の区分、年齢、含まれる意味の違いから一三の言葉がある⁽⁹⁾。これらの言葉について、その実際の用法についての厳密な違いを明らかにすることは困難であるが、少なくとも辞書的な意味での違いを前提として理解して置く必要があり、我々もその前提の上から物語を理解する必要がある。

子どもを示す箇所

「マルコによる福音書」において子どもをさす言葉は、69 箇所が存在する⁽¹⁰⁾。しかし、「神の子」等に比喩的に用いられる子（フィオス）という表現を除くと、物語の登場人物として子どもが登場する場面は、決して多くはない。またこれは極めて重要な事実であるが、イエスが「子どもとは何か」というような形で子ども観を直接述べているよう箇所は、一箇所も存在しないのである⁽¹¹⁾。強いて言えば、10 章 23～31 節にある、「福音」のために捨てることを求めている一覧についてイエスが述べている箇所である。そこには「子ども」が含まれているが、それを逐語的に引用しキリスト教教育の思想的厳選とするならば、キリスト教教育自体が存在しなくなるだろう。それ故、我々が考察の対象とするイエスと子どもとの物語は、子ども観を引き出すには容易ではない箇所、間接的に子ども観を示すに過ぎない箇所であることを十分に留意しておく必要がある⁽¹²⁾。聖書に、特に「マルコによる福音書」に限定して言えば、野山で子どもと楽しく遊ぶようなイエスの描写は存在しないし、またそのようなイメージを現す物語も存在しない。それは史的イエスの探求と同じように、解釈するものの願望や理想を行間あるいは何も無いところに投影したに過ぎない。

しかしながら、J・G・ヴォルフは、イエスは明らかに少なくとも四回子どもを強調して言及していると述べている⁽¹³⁾。ヴォルフは、イエスが語る子どもの本質について以下の四点にまとめている。第一に、子どもはイエスの弟子たちが保護しまた仕える対象であること、第二に、子どもは神の国を受け継ぐ存在であり、またそこに入るモデルであること、第三に、子どもは霊的な事柄を鋭く見抜く存在であること、第四に子どもはイエスの象徴であり、子どもを喜んで受け入れることは、

イエスと神を受け入れることに結びつくことである⁽¹⁴⁾。子どもを強調しているこれらのイエスの教えで明らかな点は、子どもに価値があるのは、何らかの条件付けによってではなく、その本質にあるとしていることである。子どもは心身ともに成長過程にあるが、ヴォルフは、イエスが子どもが何になるかではなく、現在、何であるかを特に問題としていると主張しているのである。

ヴォルフが提示した箇所には、「マルコによる福音書」の物語が二つ含まれている（マルコ 9：33-37、10：13-16）。それ故、我々は、その二箇所の物語について探求することとしたい。

9 章 33～37 節

この箇所の子どもは、パイディオンという言葉が用いられている。これは狭義の意味では七歳未満の幼児であるが、広義の意味では少年少女までを含めた子どもをさす言葉である。我々は以前、この子どもを脇役の一人として、特にイエスの教えの媒体としての役割を持つ登場人物と位置づけた⁽¹⁵⁾。すなわち、一つの物語の中で主体的な役割を演じずに、あくまで場面の小道具のように登場するのである。

前後関係を見ると、この物語はイエスの第二回受難予告の後に位置している。場面はカファルナウムのある家の中である。この物語の主題は弟子の無理解の読者に対する提示である⁽¹⁶⁾。弟子たちは、イエスが二回も受難について語ったにもかかわらず、その意味を把握していなかった。「彼らは黙っていた。途中でだれがいちばん偉いかと議論し合っていたからである」という語り手の言葉がそれを示している。そのような中で、イエスは一二人を呼び寄せて教えを語る。敢えて一二人と書いてあるのは、弟子たちを更に狭義の弟子たちに限定して教えを語っていることを意味する⁽¹⁷⁾。これから始まるイエスの言葉が、特に重要であると、読者の関心を引き起こすような形で述べているのである⁽¹⁸⁾。そしてイエスは、「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」と語る。その後に教材のように「子ども」が登場する。その登場の仕方は唐突のように思えるが、33 節に「一行」という言葉があり、それは特定の主語をもたない

三人称複数の人々を示す言葉である。それ故、それまで物語を読み進んで来た読者には、この言葉によって、イエスの周囲に呼び集められた一二人の他、多くの人間がいると想像するように促されている。それ故、この子どもの登場は、決して唐突ではない⁽¹⁹⁾。問題となるのは唐突さではなく、それまでの 33~35 節のイエスの言葉と 36 節以降のイエスの言葉とのつながりが悪さである⁽²⁰⁾。33~35 節までの物語は、完結しているように思えるからである。また 36 節以降だけを取り上げるならば、後に出てくる 10 章 13~16 節にこの部分を置いた方が、結びつきが良いようにも思えるのである。事実、「マタイによる福音書」平行箇所 (18:1-5) では、弟子たちの議論の話が削除されており、つながりを良くしてイエスの言葉をすっきりと纏め上げている。しかしながら、「一人の子供の手を取って彼らの真ん中に立たせ、抱き上げて言われた」(36 節) という語り手の説明は、敢えてこのつながりの悪さを通じて何かを語ろうとしていると考えるべきだろう。

我々は、同様の描き方をすでに知っている。それは、3 章 1~6 節の物語である。そこでは、安息日にイエスが手が不自由な人を癒すかどうかを伺っている敵対者に対して、自分とそのような者たちとの真ん中にその人を立たせているからである。そこでのイエスは、手が不自由な人を真ん中に立たせた後、この男の苦しみを無視して安息日について議論する敵対者たちに考え直すことを迫っている。手の不自由さは、人命の危険というほどの緊急性はないが、そもそも目の前にいる一人の人間の不自由さ、苦しみを無視して安息日について議論することへの再考を敵対者に迫っている⁽²¹⁾。ここでも同様のことが考えられるのである。

その場合この物語は、二つの事柄を指し示すと思われる。第一は、弟子の無理解が、かなりのレベルに達しており、すでに 3 章 1 節以下で語られた物語の敵対者たちと同じ位に達しているということである。すなわちイエスと共に歩む弟子たち、特にその中心的な構成員である一二人は、イエスの活動とその受難予告の意味をも全く理解せずに、誰が一番偉いか、イエスの言葉を借りれば「一番先に」なるかを問題にしていたのである。そのような弟子たちに対して、イエスは自分の教え「い

ちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい」と語り根本的に考え直すことを、子どもを真ん中に置いて迫っているのである。ここでの強調点は、あくまで偉いこととは何か、仕えることとは何かについての弟子たちに対する、間接的には読者に対する教えに他ならない⁽²²⁾。第二は、イエスが子どもを抱きあげることによって、子どもを仕える対象の一つとしていることである。37 節は、受け入れるという言葉を用いており、目的語は直接的には子どもであるが、最終的な目標として目指されているのは、イエスと神を受け入れることである。すなわち子どもは、神とイエスを受け入れることの類比あるいは具体化の一つということである。それは一見 35 節のイエスの教えとは無関係に思えるが、そのパラドックの具体的説明に他ならないのである⁽²³⁾。3 章 1~6 節の手が不自由な男の物語において、その男の位置づけは、確かに教えのための題材であった。しかし、同時にイエスが受け入れ、安息日の規定よりも優先して癒そうと願う対象であった。その意味では、イエスは、そのような苦しみの中にある存在と同じ状態にある者として「子ども」を見ていると言えるのである。この箇所は、「子ども」だけを特別に取り上げて強調しているわけではない。しかし、「子ども」をイエスがそれまで共に歩んできた身体的精神的霊的に苦しみの中にある人々と同じように見ているということを示しているのである。それは、子どもも、病気で苦しむ人々、貧しい人々、女性たち、汚れているとされた人々など、「小さくされた人々」の一つに含まれるということである⁽²⁴⁾。この「仕える」という主題は、更に 10 章 35~45 節の物語で更に明確にされる。ここで留意すべき点は、この物語において、確かに子どもが、イエスに従おうとする者にとって、共に歩みそれに仕える存在であることを意味しているということである。しかし、この物語の子どもは、積極的、主体的な活動、他の弟子達の模範になるような活動をしたような、他の脇役たちと同じではない。すなわち、読者の行動の指針・モデルとなるような存在としては描かれていないのである⁽²⁵⁾。物語が示す事柄は、「子ども」が「小さくされた人々」の一員であるということに他ならないのである。

10章 13～16節

この箇所の子どもは、パイディオンという言葉が用いられている。それ故、用語については、9章 33～37節と同様のことが言える。また、脇役としての位置づけも同様である⁽²⁶⁾。

この物語は、三回に及ぶ受難予告の前後に配置されたイエスの教えの物語の一つであり、離縁についての教えの物語（10：1-12）と、イエスに質問するある人の物語（10：17-22）との間に位置している。しかし、前者に関しては、結婚と離婚を題材とした物語の後であるが故に、子どもの物語が続くというぐらしか関連性がない。より関係が深いのは、その後に続く物語の方である⁽²⁷⁾。神の国という主題で結びついているからである。

この物語には具体的な場所が示されていない。それ故「ユダヤ地方とヨルダン川の向こう側」（10：1）ということになる。イエスに触れてもらうために、「人々」が子どもたちを連れてくる。この人々も、特定の主語を持たない三人称複数の人々であり、10章 1節でイエスのもとに集まって、いつものように教えを受ける群衆の一部である⁽²⁸⁾。どのような種類の人々がいるかは明らかではない。『新共同訳聖書』では、「弟子たちはこの人々を叱った」とあるが、こちらの「人々」も直訳では「彼ら」であり、弟子たちが叱ったのが、子どもたちであるのか、子どもたちを連れてきた人々であるのか、その両者であるのかは明確ではない。しかし、物語の関心はその特定にあるのではなく、弟子たちの行為とそれへのイエスの応答である⁽²⁹⁾。

弟子たちがなぜそのような行動に出たのかについて説明は全くない。しかしながら、物語の読者は、すでに9章 36～37節の物語で、弟子たちが子どもを題材とした教えを受けていることを知っている。つまりここでも、弟子たちの無理解が更に強調されているのである⁽³⁰⁾。弟子たちは、物語世界で言えば、恐らく数日ぐらい前、『新共同訳聖書』の頁で言えば、前頁で、「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである」と教えられたばかりである。しかし、それすらも忘れていた。ここでも第一の主題は「弟子の無理解」であり、それが「子ども」を題材として描かれているのである。

14節の「イエスはこれを見て憤り」という言葉は、かなり強く弟子の無理解を強調していると言える。3章 5節の「手が不自由な人」の物語では、頑なな敵対者に対して、「イエスは怒って人々を見回し、彼らのかたくなな心を悲しむ」のであった。そこには明らかに二つの感情が並置されており、特に「慈しむ（愛する）」という言葉がある。ここでは「怒る」と「憤る」とギリシア語は異なるものの、イエスは憤って教えるだけである。これは語り手による登場人物の内面についての描写であり、強調の手法である⁽³¹⁾。事実その後には厳しい言葉が続くのであり、いかに弟子たちの間違いが大きい事柄であるかを強調しているのである。

「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。」このイエスの言葉は、「弟子の無理解」を更に「神の国」という主題と結び付けている。「マルコによる福音書」という物語は、イエスの宣教を「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」という言葉から初めている。イエスを受け入れ、福音を信じ、神の国に入ることは、物語で生きる登場人物達が目指すべき、そして読者が目指すべき最終的目標である。「神の国」は、物語全体を通じた主題の一つであり目標なのである。物語は、「神の国」という観点からすべてを読むように促していると言っても過言ではないだろう⁽³²⁾。

それ故神の国と言う物語にとって本質的に重要な課題に結び付けられているが故に、イエスのこのような弟子を批判する言葉は、物語の中にあるアイロニーの一つである⁽³³⁾。物語の最初からイエスに従った四人の弟子たちから始まり、その人数すなわち広義の弟子たちの人数は、物語の展開に応じて増えていく。そのような中で、特に一二人と限定された弟子たちは、イエスから権能を授かりイエスと同じような活動をしている。弟子たちは、イエスの到来が神の国の始まりを意味していることを理解し、自分たちもその活動に参加しているという意識があったと考えられる。しかし、逆にそうであるが故に、誰が一番偉いかという議論まで起こったのであろう。弟子たちは、自分たちこそが神の国の所有者であると考えていたのであろう。弟子たちがどのような神の国を想像して

いたのかについて物語は明確には何も記していない。しかし、少なくともイエスの受難予告を理解しなかったが故に、イエスの示す神の国とは全く違う事柄を想定し期待していたことは確かであろう。その無理解あるいは勘違いが、最終的にイエスの逮捕に際しての弟子たち逃亡へとつながる。自分たちが神の国を所有している。神の国は自分たちのものである。そのように考えている弟子たちに対して、イエスは、彼らが追い出そうとした子どもたち、神の国はそのような子どもたちの所有である、今日の前で追い出そうとした子どもたちのものであるのように語ったのである。これはかなり強調されたアイロニーであり、弟子批判である。またこの批判は、物語世界内の弟子たちに留まらないだろう。物語は、読者が弟子たちに自己同一化して読み進むように促している⁽³⁴⁾。それ故に、このアイロニーは読者にも向けられることになるからである。そのことが物語の歴史的読者批判、あるいはその時代の教会批判となるかどうかは我々の考察対象ではない⁽³⁵⁾。我々にとって重要なことは、もし読者が弟子たちに自己同一化し、自分たちも神の国の所有者であるという自覚があったとするならば、そして弟子たちと同じ様に子どもを受け入れていないとするならば、このイエスの言葉は読者に対しても、アイロニー更には警告として響くということである。

イエスは、「はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」と続ける。ここでは、明らかに子どもが神の国に入るモデル・模範とされている。その意味では、以前に我々が考えた教えの題材という以上の意味があると考えざるを得ない⁽³⁶⁾。しかしながら、その質は他の脇役たちと全く異なっている。子どもたちの具体的な行動が何も示されず、イエスに従い、豊かに実を結ぶ存在とは描かれていないからである⁽³⁷⁾。

神の国を神が良しとする世界、神の支配と救いが満たされる世界とするならば、マルコによる福音書という物語は、その活動を通してそれを実現しようとしているイエスを描いている。そして多くの脇役たちは、イエスと同様にその行動の共労者となっている。すなわち登場人物の中でも模範・モデルとしての存在である。それでも神の国は大

人ではなく子どものもの、「子どもの世界」であるかのようにこの箇所は語っているのである。しかし、子どもたちの具体的な行動は何も記されていない。彼らは人々に連れられて(運ばれて来た)だけである。そしてイエスによって抱き上げられ、手を置いて祝福されるだけである。これは、病気の癒しでも悪霊追放でもない。長老が村の子どもを祝福するように、子どもたちに祝福を与えているだけであり、冒頭に見たユダヤ社会での子ども観の一例に過ぎない。しかしながら、特別な行動が示されていないからこそ、この子どもに特別な事柄が意図されているのである。中風の男と同じように、そして自力ではイエスのもとに近づくことが出来ない他の病人たちと同じように、イエスのもとへ運ばれてきた点で一致しているからである。

中風の男には、それを運んだ四人の男との信頼関係、そしてイエスへの信頼が見出された。それはイエスによって「信仰」として高く評価された⁽³⁸⁾。同様のことがこの子どもたちにも言えるだろう。この物語の子たちの場合、特別緊急性を要する病気などは描かれていない。またイエスの祝福なしに生きることは可能である。また子どもたちがそれを望んだかどうか不明である。しかし、彼らは人々に運ばれて、弟子たちの妨害をも超えて、イエスから祝福を受けた。そこに本質的、存在的に神の国に入る理由が存在するのである。それは、中風の男の物語が示す「信仰」と類似すると同時、それを超える本質が含まれているのである。

何故子どもが模範・モデルか

神の国に入る、救われる条件があるとするれば、それは大人は、大人ではなく子どものようにならなければならないということである。つまり大人のモデルは子どもである。何故子どもが模範となるのだろうか？それは、子どもが純粋であるとか無邪気であるとかいうようなことが理由ではない。マルコによる福音書の物語には、そのような物語も文言も一切ない。ただ、子どもを「小さくされた者たち」の一人に並べているだけである。また子どもが何か特別な行動をしたようには描いていない。その存在、それで十分なのである。

上記のヴォルフが示したのように、子どもは、衣食住を含めて、精神的にも身体的にも誰かがいなければ生きて行けない存在である。子どもは、養育・保護が必要な存在である。逆に言えば、ユダヤの社会では、自分ひとりで生きることが出来るように、一人前あるいは大人となるように子どもを厳しく教育する。それは現代も同じであろう。しかし、本質的に人間は、一人で生きることが出来ない、支え合わなければ生きて行けない存在である。イエスの物語全体はそれを示している。神の国はそれをしっかりと自覚した人々の国である。子どもは、本人の自覚とは無関係にそのような状態にいる人間である。だからこそ、本質的に、神の国は子どものものであり、そのようであればそこへ入れないのである。

イエスが評価・強調しているのは、子どもの本質である。それは、子どもを「未成熟・未完成な大人」あるいは「発達途上の人間」と見るのではなく、現在の子どもの状態に意味があるということである。これは、キリスト教教育、そして幼児教育においても重要である。発達段階に位置付けて子どもを見ることも大切であるが、現在の子どもの価値は、次にどれ程発達するかには価値があるのではなく、今の状態にこそ価値が存在するのである。それは、他のすべての人間にも当てはまる事柄である。物語は、直接的には弟子たちに対して、そして間接的に読者に対する神の国の教えの中で、子どもについて扱っている。それは、必ずしも歴史的イエスの真正の言葉であるとは言いきれない⁽³⁹⁾。しかし、物語のイエスは、間接的ではあるが、そのような子ども観を提示しているのである。

イエスの子ども観の現代的意味

このようなイエスの子ども観は、現代の我々に何を示しているのだろうか。現代の我々は高度に発達した教育理論・技術を保持している。その意味では、子どもにより良い教育を与える準備が整っていると言える。しかしながら、同時に地球的規模で高度に発達した自由市場的資本主義の論理が、それとは別に今までにない子どもへの影響をも備えている。それは子どもを製品、消費者、そして重荷として見るということである⁽⁴⁰⁾。我々は、様々

な先端医療技術によって、子どもをある程度任意に製作することが出来るようになってしまっている。また胎児教育を初め、整った教育への準備は、大人の意図通りに子どもを育てる手助けをすると同時に、子どもを消費者として、出費をするのは保護者であるが、そのように位置付けている。しかし、同時に、教育に掛かる費用、及び育児という労力は現代においても重荷の一つなのである。そのような現実があると同時に、経済的な先進国も含めて現代社会は必ずしも子どもたちに安全な場所を提供しているとは限らない。また必要最低限の食事あるいは安全な食事を確保しているとも限らないのである⁽⁴¹⁾。

イエスの時代にも、子どもにとっては同様の状況が存在した。勿論、先端医療などはない存在しないが、少なくともユダヤ社会は、大人たちは子どもに対して教育の準備を整えていた。同時に安全と食事すら確保できない子どもも多く存在した。イエスは、そのような中で、神の国について教えたのである。それゆえに、その使信は現代でも有効であり、子どもに対する本質的な問題が変わらずに、複雑さだけが増している現代こそ改めて認識する必要があるといえるだろう。現代でも、「神の国はこのような者たち（子どもたち）のもの」であり、我々大人がどれほど学術的・経済的・技術的に発達しても、「子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」からである。

【注】

- (1) 小林公一編著、『キリスト教教育の背景』、ヨルダン社、1979年、197頁。
- (2) 『キリスト教教育の背景』、202頁。
- (3) R・C・ミラー著、安村三郎訳、『聖書神学とキリスト教教育』、日本基督教団出版局、1972年、22頁。
- (4) 『聖書神学とキリスト教教育』、38頁。
- (5) コンコルダンス的に聖書から子どもについての箇所を抜粋し考察することは可能である（児玉衣子著、『聖書の子ども観』、青山社、2000年）。しかし、一つ一つの箇所を聖書学的に厳密に釈義し、神学的考察を述べることは困難である。

- (6) テクストの構成モデル (著者・読者の歴史的著者・読者、暗示的著者・読者、登場人物の分類) に関しては、Powell M. R., *What is Narrative Criticism?*, Minneapolis, 1990, Chatman S., *Story and Discourse: Narrative Structure in Fiction and Film*, Ithaca and London, 1978 を参照。
- (7) S・サフライ他著、長窪専三他訳、『総説・ユダヤ人の歴史中——キリスト教成立時代のユダヤ的生活の諸相——』、新地書房、400 頁、1991 年。
- (8) 『総説・ユダヤ人の歴史 中』、402 頁～405 頁。ハンス・リュウディー・ウェーバー著、梶原寿訳、『イエスと子どもたち』、新教出版社、153 頁以下。
- (9) 『イエスと子どもたち』、116 頁以下。
- (10) その種類等の区分については、『イエスと子どもたち』、129 頁参照。
- (11) 聖書本文は『新共同訳』による。代名詞を「子ども、娘」等に訳出した部分を除くと、以下のようなになる。
- ①「ヤイロとイエスの服に触れる女の物語」(5 章 21 節～43 節)。ヤイロのイエスに対する願いの言葉「幼い娘 (シュガトゥリオン)」(23 節)、イエスの服に触れる女に対する言葉「娘 (シュガテール)」(34 節)、人々がヤイロの娘の死を告げる言葉「お嬢さん (シュガテール)」(35 節)、人々に語るイエスの言葉「子ども (パイディオン)」(39 節)。イエスの動作についての語り手の言葉として「子ども (パイディオン)」(40 節、41 節)。立ち上がった少女への語り手の言葉として「少女 (コラシオン)」42 節。
- ②「バプテスマのヨハネの死について回想物語」(6 章 22 節～29 節)。「ヘロディアの娘 (シュガテール)」(22 節)、「少女 (コラシオン)」(28 節)
- ③「汚れた霊にとりつかれた子どもの癒しの物語」(9 章 14～29 節)。取りかかれた子どもの父親の言葉として「息子 (フィオス)」(17 節)。それ以後は代名詞。
- ④「弟子たちの一番偉い物についての議論の物語」(9 章 33～37 節)。イエスが抱き上げる子どもとして「子ども (パイディオン)」(36 節)。
- ⑤「イエスが子どもたちを祝福する物語」(10 章 13～16 節) 人々が連れてくる子どもたちとして「子ども (パイディオン)」(13 節)。神の国について教えるイエスの言葉の中で「子ども (パイディオン)」(14、15 節)。
- ⑥「福音のために捨てるものの一覧について」(10 章 23～31 節)、イエスの言葉の中で「子ども (テクノン)」(29 節)。
- (12) 『イエスと子どもたち』、8 頁以下。
- (13) J. Gundry-Volf, "The least and the Greatest: Children in the New Testament", in *The Child in Christian Thought*, ed. M. J. Bunge, 2000. Eerdmans Publishing Company, 29-60. 箇所で言えば、マタイ 18 章 1～5 節とその平行箇所 (マルコ 9 : 33-37、ルカ 9 : 46-48)、マタイ 19 章 13～15 節とその平行箇所 (マルコ 10 : 13-16、ルカ 18 : 18-30)、マタイ 11 章 25～30 節とその平行箇所 (ルカ 10 : 21-22)
- (14) "The least and the Greatest: Children in the New Testament", in *The Child in Christian Thought*, p.36-45.
- (15) 拙論、「マルコによる福音書の脇役——その役割と機能——」、『キリスト教学第 40 号』、立教大学キリスト教学会、1998 年、128 頁。
- (16) J. D. Kingsbury, *Conflict in Mark Jesus, Authorities, Disciples*, Minneapolis, 1989, 12, Fowler, R.M., *Let the Reader Understand Reader-Response Criticism and the Gospel of Mark*, 1996, Harrisburg: Trinity Press International, 72-73.
- (17) D. H. Juel, *The Gospel of Mark*, 1999, Nashville, Abingdon Press, 75.
- (18) Fowler, *Let the Reader Understand*, 73.
- (19) 拙論、「マルコ福音書の群衆像——物語批評の試み——」、『キリスト教学第 38 号』、立教大学キリスト教学会、1996 年、178 頁。この子どもの登場の仕方はあまりに唐突のように思えるが、物語の導入には、「一行はカファルナウムに来た。家に着いてから」

- (33 節) とある。一行 (彼ら) には、イエスと弟子の他に群衆など多くの登場人物が含まれている可能性があり、一行という言葉にそのような登場人物を想定していれば、子どもが登場することはそれ程驚くべきことではない。
- (20) M. D. Hooker, *The Gospel According to St Mark, Black's New Testament Commentaries* London, 1991, 229.
- (21) 拙論、「脇役達の福音書マルコを読む 4」、『福音と世界』、2000 年、5 月号。10 頁以下。
- (22) R. H. Gundry, *Mark A Commentary on His Apology for the Cross*, Michigan: Eerdmans Publishing co., 1993, 509.
- (23) Fowler, *Let the Reader Understand*, 188
- (24) D. Rhoads, D. Michie, *Mark as story, An introduction to the narrative of a Gospel*, Philadelphia: Fortress Press, 1982. 128-136, Kingsbury, J. D., *Conflict in Mark Jesus, Authorities, Disciples*, Minneapolis: Fortress Press, 1989, 26.
- (25) J. F. Williams, *Other Followers of Jesus, Minor Characters as Major Figures in Mark's Gospel*, JSNTSup.102, Sheffield: JSOT Press, 1994. 145.
- (26) 拙論、「マルコ福音書の群衆像 —— 物語批評の試み ——」、178 頁。
- (27) Hooker, *The Gospel According to St Mark*, 238.
- (28) 拙論、「マルコ福音書の群衆像 —— 物語批評の試み ——」、178 頁。
- (29) Gundry, R. H., *Mark A Commentary on His Apology for the Cross*, 544.
- (30) Hooker, *The Gospel According to St Mark*, 238.
- (31) Fowler, *Let the Reader Understand*, 120-123.
- (32) Fowler, *Let the Reader Understand*, 17.
- (33) Fowler, *Let the Reader Understand*, 173.
- (34) R. C. Tannehill, "The Disciples in Mark: The function of Narrative Role", in: *Interpretation of Mark*, London, 1985, 995, 138.
- (35) T. J. Weeden, *Mark Tradition in Conflict*, Philadelphia Fortress Press, 1971.163-168.
- (36) 拙論、「マルコによる福音書の脇役 —— その役割と機能 ——」、128 頁。
- (37) M. A. トルバート、「マルコ福音書は人物をどのように作り上げているか」『インタープリテーション 第 26 号』、1994 年、A T D・NTD 聖書註解刊行会、33 頁。
- (38) 拙論、「脇役達の福音書マルコを読む 3」、『福音と世界』、2000 年、3 月号。2 頁以下。
- (39) The Jesus Seminar, *The Five Gospels. The search for the authentic words of Jesus*, 1993, New York: Scribner, 89. 有名なこの書物は、14 節をほぼ真正の言葉とし、15 節は、どちらとも言えないとしている。
- (40) D. デブリース著、拙訳、「子どもの視点から神学を考える」『インタープリテーション 第 62 号』、2001 年、A T D・NTD 聖書註解刊行会、86 頁。
- (41) D. デブリース著、「子どもの視点から神学を考える」、96 頁。

The Children in the Gospel of Mark

— Their Roles and Functions —

Sugawara, Yuji*

現代社会は、必ずしも子どもにとって適切な環境ではない。それは経済的に発達した社会においても、そうではない社会にとっても同様である。そのような中で、キリスト教教育・保育という教育が存在し、それが様々な教育機関でなされている。現代社会において、そのような教育の特徴は何であろうか。また何を目標にすれば良いのであろうか。またその思想的源泉は何であろうか。それに対して答えることは、容易な作業ではない。その思想的源泉について、それが神学でありまた聖書そしてイエスの活動・生涯であるということは否定出来ない事実であろう。それでは、聖書は、教育特に子どもについてどのような事柄を語っているのであろうか。

ここでは、「マルコによる福音書」に対象を限定し、特に物語としてそれを読んだ場合、子どもにどのような事柄が語られているか、イエスはどのように語っているかについて再考する。それは単にキリスト教の思想的源泉としてではなく、もし子どもの本質や子どもを取り巻く環境に二千年前と現代と類似点があるとするならば、現代の我々にも大切な言葉として響くと思われるからである。

キーワード：子ども，キリスト教教育，新約聖書学，マルコによる福音書，脇役